

◆最優秀賞◆

詰められた想い

神明 中学校 三年

安原 壱 閃

「弁当箱出してねー。」

いつもの声が響く。中学三年目だというのに恥ずかしながら僕は弁当箱を出す習慣が、身に付いていない。もし出さなかった場合、明日の昼食が保証されないので慌てて出している。

僕の弁当歴は幼稚園と中学生の今。幼稚園の頃はお気に入りキャラクタ―の弁当箱を使っていた。弁当を開けると食べやすく詰められたおかずがカラフルなピックが飾られていた。隣の友達と見せ合いっこしながら食べた美味しい思い出。

中学生の今はシンプルな曲げわっぱの弁当箱になった。母いわく、パーツが少なくて洗いやすいらしい。どちらかといえば、彩りとか無関係な茶色弁当。幼い頃と同じなのは、僕の好きな物だけが入っているところ。定番なのは卵焼きとウインナーだけど、前の晩の残りの唐揚げやハンバーグも冷凍食品だつて大歓迎。

僕は苦手な物が多いから似たような弁当になって飽きないか、と母によく聞かれる。飽きるどころか好きな物だけの弁当に好感しかない。好物ばかりの弁当だから、ほぼ残すことはないのだけれど、ごく稀に残してしまうことがある。

そんな日は弁当箱を洗っている母に、

「体調悪かった？」

と尋ねられる。

「暑かったから食欲がなかっただけ。」

僕がそう答えると、次の日の弁当には冷えたゼリーが多めに入っている。ケンカして気まづくなつた日の弁当は、いつも以上に僕はきれいに食べる。僕なりの反省の儀式。

だけど、夏休み明けからは中学校も給食になるため、母とのこんなやり取りもなくなってしまう。給食になつたら楽になると母は喜んでいて、僕は給食よりも弁当が好きだから複雑な気持ちになった。それにどうして苦手な物を弁当に入れないのか僕はずっと気になっていた。

「好きな物を食べた方が元気になるから。」

これが母の理由だった。僕のことをわかってくれる人が作る弁当はどれほど安心安全なのだろう。確かに弁当を食べて元気になったことが何回もあった。午後からの部活も頑張れた。毎日欠かさず作ってくれた安心安全弁当には、母の想いも詰まっていた。

来年の春、高校生になつて弁当生活が復帰するのなら、僕は毎日残さず完食しようと思う。それが僕から母への感謝の意味だから。